

部落解放・人権行政確立要求 和歌山県実行委員会第24回総会

8月6日、プラザホープで部落解放人権行政確立要求和歌山県実行委員会第24回総会がひらかれた。和歌山県共闘会議や解放同盟をはじめ実行委員会加盟団体より約180人が参加した。

総会は、河波潤（和歌山同企連）県実行委員会事務局次長の司会で議事がすすめられ、主催者を代表して赤松明秀（和歌山県同宗連議長）副会長は「今日、田上会長が公務の関係で出席が遅れています。これまでに実行委員会として『人権侵害救済法』の早期制定に向けてとくくみをおこなってきた。国会情勢のなかで

『人権委員会設置法案』として名称が変更されるなど、いくつかの問題点があるものの、今国会での成立をめざしていきたい」とあいさつした。つづいて、来賓の堂代和孝和歌山県人権局長、平田謙司和歌山市市民部長より祝辞をうけた。藤本哲史事務局局長は2012年度基調提案で「『人権の世紀』といわれながら、

量的・位置的に全国的に非常に少なくなってきた。第57回県連大会で次代を担う活動家の育成の必要性を決定した。県下の青年の組織化は、「すべての支部に青年部を！」と、とりく



記念講演の講師
友永健三さん

政治的に多くの課題を見過ぎてきた。人権の流れをいま一度再点検し、『人権侵害救済法』の早期制定をはじめ人権行政確立に向け更なる運動を展開していく必要がある」とのべ、さまざまにとくくみの方向性を示した。

つづいて、決算報告、会計監査報告、予算案の提案の後、質疑応答、新役員発表があり総会が無事終了した。

第43回部落解放 人権夏期講座

8月22日、24日、高野山大学松下講堂黎明館、高野山会館ホールで部落解放・人権夏期講座が開催された。1日目の全体講演は2会場でおこなわれ、「水平社宣言を読む」と題して全国部落史研究会運営委員の渡辺俊雄さんより、「部落解放運動の歩み」のDVDが上映され、綱領・宣言・則・決議の4つの文書の特徴について話された。また、高野山会館では「東日本大震災及び原発事故による南相馬市の現状とこれから」と題して南相馬市議の小川尚一さんより南相馬市の現状と原発事故について講演があった。（次号につづく）

この夏2つの中央集会在開催された。1つは第44回全国高校生集会、そしてもう1つは、第56回全国青年集会である。

全国水平社が結成されて90年を迎えるの集会であり、解放運動における青年の果たす役割が非常に重要であることが90年の運動の中から見えてくる。

主張

青年、女性の要求を結集し、 次代を担う活動家の育成を！

全国水平社は、20代の青年が運動をけん引してきた。そして、少年・少女水平社も結成され、常に運動の中心に青年たちのエネルギーがそこにあった。以来、90年にもおよぶ闘いが今日まで推しすすめられてきたが、ここに来て青年たちが運動に占め

られていくが、子どもも会活動もすべての支部や地域で実施されるにいたっていない。差別は見えにくくなったと考える一方、カミングアウトすることに躊躇する青年が大勢いるのが差別的存在を物語っている。各支部

で、青年の実能を把握し、課題を仲間と共有し、いま必要な解放運動を創造しなければならぬ。全国水平社結成以来、解放運動の中心には女性と青年の存在があった。全国水平社結成90周年を迎える今

日、いま一度、県連組織はもとより、各支部の組織の再点検と、青年、女性のもっている要求を支部に結集し、解放運動としてのよう組織するかが問われている。各支部で教育・仕事・住宅・子育てなどを運



水平社宣言について講演する渡辺俊雄さん

狭山事件を 考えよう



狭山事件が発生してからも50年を迎えようとしている。事件当時、私は14歳であった。当時の記憶はないが、それから何年かして向陽高校で同校生徒らが学校にたてこもるといいう事態が起きた。教師の狭山事件にかかわる発言がきっかけだった。そして、その中心にいたのが子ども会顔見知りだった藤本君（現在の県連書記長）らであった。そこで初めて、部落差別が狭山事件の背景にあると感じた。それから私自身も子ども会の活動や解放運動のなかでさまざまなかかわりをもったし、ある意味で青春の思い出と重なることが多々ある。連れ合いと結婚しようと思ったのも2人で参加した寺尾判決（1974年10月31日）に抗議する日比谷公園での10万人集会の帰りであった。その後、生まれてまもない息子と3人でバスで狭山集会へ参加したこと、地域の青年や高校生と和歌山市駅でのピラマキ、などなどである。余談であるが、私の姉が狭山事件をめぐって義兄と喧嘩し離婚の危機に瀕したのもこの頃のことだ。私は必死で仲裁をした。いまは仲良しであるがそんなこともあった。考えれば、そんな私も63歳まで秒読みにきている。私の実感としては「もう50年たつのか」といったところで、そんなに長く感じていない。そんなことより、これからどうすべきかという思いの方が強い。いま、最大のチャンスが来ているからである。狭山の闘いは、差別撤廃へのこえなければならぬ絶対の課題である。さらに、頑張っていきたい。（池田 清郎）

文化の窓

映画紹介

「おじいさんと草原の小学校」

イギリスの植民地支配から独立をかちとったケニアは、2003年に無償教育制度をスタートさせた。教育を受ける権利をえた子どもたちが学校に押しかけるなか、84歳のお爺さん「マルゲ」の姿もそこにあった。差別・貧困・迫害で教育を受けることの出発点でマルゲは「自分で文字を読んで過去をとり戻し、未来につなげたい」と毎日何キロの道を歩き入校を希望するが受け入れられない。しかし、やっと思いで希望の光が射した。ギネスにも最高齢の小学生で話題となった実話の映画である。2010年・121分